敬

世乃栄枯　甲

ホ 2
621
1

蜘乃いと巻甲巻目録

○てにをはの大意　○てしく
○に　○無　○ものゆゑ
○は　○す　○ちす
○を　○の　○もしも
○さくたに　○かぞやは　○けりめりらん
○べしへしましつるぬるの事
○さへ　○こた　○かは
○や　○なむならむ　○らん
○らし　○浅　○めぬめる

○つ

○船

○てふを抜詞ニ用ル方例

蜘のすぢ乙巻目録

○虚字の事　○唯　○将
○早　○先　○いで
○いざ 清濁　○猶　○又
○かは　○かつ　○さて 清濁
○かく　○けに是　○すなはち
○彼　○さと 清濁　○ちふ
○とし　○まし　○もし
○かな　○まく　○はなり
○落放　○りて　○いとゞ

○いやいよく ○やく ○やよ

○げゞ小 清濁 ○むへ ○まに

○まにまふく ○さハ さも さや はて はてう

さのこ はかり さり はも はかう さしなから

さ阿 さ阿て はかハ さして さらぬ 志う

○はるゞ志づす ○やゞて ○あへね

○まさいまさ ○まされ ○やゞく

○いふいくいらく ○いのいつゞ

○いはいついら いくいつこ ○せめて

○あゞれ ○まさけ ○なけき

○利收 ○清無る ○打附祖比

○折引立押

蜘乃いとまき　甲斐某著

○てにをはの大意

およそ歌によみいづる詞のてにをはゝ一字にても字をひ
め置ハ千里のさきにも至る者かれ事なり詠る
てにをはの四字ハ掛紐断る文字也　細引|縄よ(也)今縄之
春めとこそ川をもみぢぞちり居ハ花なれ里に住やすらくる
ともあれば第二句をとでの字第三句れハ第四句のに
の字をりに掛紐例まもいづるは歌乃結紐續く思惟
する時ハ教養にかゝりて大意遠ふ垂らるれども
首乃題よりよく推量綾意にかくし一提(カキ)をして

衆戸を明へかし須先達堪能乃かた縦廣く見ん
あらく味ふ無し

○て　して

でハ助字ニ而といふに同し而と字書ニ承ス下之辭又
因是之辭学而時習之是也と注せり因是之辭と注
せるハ細に従よと従而て下と起ると注せる意也へし流みより系をうけて本ちる語を
とりあるゆゑ考合すへし又でハ流とて又大体同し
でとまでハ五音通せりよくへすもかうしてなき見ゆるで
差うて心得へし強きともでハ当然の意にて輕く流とも
つちの器にて重く意味有無し川まとハ切る伐見

川くもなくさあつてといふに従無さるてといふくさ也
清輔かに堀かきのうち風によりくハ大鳴りて
きあるも月影とてあるハ乃すさし合ふれと見える紀か
歌て千載集にいまりは才之句才写句めて乃すこえ
異之才之句の終乃でハ物従さうてい才写句ハ終せし
でハ来まとたゝそ初学の人ハ相身推量へししてなく
旡るりしてでもまたひしすり代ひとりしでてとあるハ合二人
合独乃心形りきの身かたでといふハ而乃五終るり文
處の事ハことならすもけり千歳百歳か合よ
ふ年まするに路よるも一はまりさる志らぬめの短ハ志ハまるひめぬ

並經判よするしてとハ痛やとも雜せられかるは害ハ
しでハ為のかたれハなり
津乃出代ハや乃様子よ附故してなふハかゝむ草の筆勢紀
性分を像成ハ志まてしてとなきなふハりんといへるや
もそうりてるひてやゆらむしるともまいへるハそ八
何なはといへんよかるハ然と覚し侍る
凡かよう世ハ出るもすとも屍してぞ之をするんをのうらく
歩まも同じ屍してといへる詞あらくもよ絶りんをえる絶
又及侍る跡との海つま是るのなよく紀にへし
○に

赫乃角ハあらしにふかきと附会本の出ひよき歯ちはりなり
像成ハ云本のことひまくいへるにの字いさゝかかまへもあちを
と云此上句のうしにまくみまとしてとつとくいひなぬ
下句本のかゝひよきまゝはりなまといへるたりしまく
きこし侍るや
満ちる紀あしや出墨に日ハ今まきく清緑の昔に海人のいさり火
此上下の句乃にの字といふそゆの侍るを連歌ハ此句ひめ
唯二川のにのかすら耳ちらくみゆるや文中彎ハ釈主
の如しかり
此とせり乃何とる紀歯に出るかる有代の字も在郷かりに

わか紀の玄にのまかりまかりさし合する紀小町か記の歌ハへり

にかり抄いてうに我身世ふかるかうみせしまに並ハ義述

まなへ八別のすかたう古今集ノ

君かよ秋名ハむしに惹りと望にもしもかならぬ紀よう

けふハにの字五川かれと身をちてをきつて可所経一首

乃題よう画し

○画

君も川と園へもいりぬ桂の戸小いて紀をみけき山乃ち月

式子内親王乃御すとく新古今集に入てあらし 調あらう

六百番会合ノ 今すゝ園へもいりて孫の夏を

のうして助かりすのうちん 俊頼朝臣夕除園へもいりぬへなと

もたのハ伊れと千か広あやへもしく面一首の題よう

や

○秋 まの秋

秋の字ハ車 網引綾ア注と異さ まの秋として右のつひ詠り

まきえけりて人をちりも

新まかてけうけょまのひ川ゝ吹るまの紙秋乃川風

けふハ片山の里にいてしもの娘の世ハまのひゝ吹かりの紙

秋来ぬと今も又乃中より始るといふ弟子句にて頭切と号
へし　拾遺集より
し　松ハ緑よりつゝむ露のおきかれハ我秋よりの紅葉しくそおりゐ
とよみたるハ結句に頭つけてお此一首の頭とよむるハ
異なり古と集よ
し　露のくにワれつまむとおもふ其の紅葉すらむよみちハ紅よひぬ
これハ袖をワかつまんとそこしめのをと紅葉かな乱り
る乃もまとかしの時節のうつりし事を思ひ入してよめる
文相何ぞよ　し　おもひまどくまとれ浮くよくとおもふ其のあり
露ふりし萩乃やけりらはあおあれ句乃第二第三大体

おもふし頭なる哉ハ弟子のワれをつきてこりし其のとき
露ふりし萩のやけりらと当時乃心よりおゐあと心
異なるものく　結句の頭よりの紅とよめる体合行引認よ也ぬ

○は

し　露ハ袖よりの折りにハ忘られどかゝる秋のすゝひ秋の露
此袖文字二句乃はの字ともに用ゐらく志するおもしろ
くよみなし　のまゝり
し　秋ハ風はゆくうちよ露ハ何もやハおもに見ゆふかれさる
此弟三句のはハ頭体切くさく吹風は露ハ何そうるみ
はゆふ之精創の句とせ第二第三句はの字さし合されと耳

葉ちても此れと二ハ百韻云合り
かれハさパ只ゆるとてパ何事もてしらあるはの字耳まて立
しりやゆらちりしお侍る侍る
極俳の去若乃手請也此ハひ秘ハ附属ハ邪此家にたしかる
後頭の古稀もはしを重く文字くれハとしてるはの字や二句
なれく耳をまりく此句ん云古し集に
おりかりはきのかりしをまけよ句色をハひく此と思ひかの続
け神なる文字乃ぱハ神く分に句の八重し古人てかく続
めつりやの唯精重綴点を考ふる乃をおに秘授口訣と
まる事何る人うる事後世の初学おや此むまかすれ趣て

てふなのさし合るる耳まく此よ叱ハ中院通茂公か字
公の続ハ一句くつくりくしよみをひさて妙理ハ永して此とし
又りハ一句隔く切くりしまの字ハ一句く此義理を考へかひ
文ルりしく詠しかれハ一字此が付けひかの他殺返部を
永しく此されハ自てふをと乃さし合耳まいしあき
御とものあり

○了

秋のくに書る紀康乃としをてなうりり立れらひよしとす
影注小がひよハすくと何らハ紀治やとめ人きふ小しと此を
此る詞ますくて後きられと古詞ハ此にある事也

かなしといへるを業平ハ鹿のうへに人情推はかり
ていへる中うに紅葉をハふミわけてハなかなかなしき言ハ
鹿乃我恋をしりけくて紅葉ハ何そわか恋のかひなきを
しらぬうらうらなけきかなしむ也紅葉をハふミわけてそのて
ふる分明也後撰集ニ
紅葉をにしきにたとへつゝあかすおもひてやまかかまれ秋
とよめるハなかなかといひてなるかひもなきとわかをと
うらみけくなり

○ここゝろ

ここといひてふかき分別のあるハこゝろ也　なくは

ちそといひて物ちそとひかく年といふあかかへとそと
いへる大意通すへしされとも猶重複息煩へし（細了總ヲ注 今略之）

○此

此の字ハ前にあまた細かし後撰集ニ
君こふとなきにぬるゝわか袖の朽ちるもまさる
とよめる此君こふといへるハ君こふるとそ後よめるとある
あり次ニ次目乃詞のとは推量にてあらしかもへい
侮るとの字あれいさし合されと耳立ても首をを

○の

古今集なとの忠峯いつての昔よりとりにありと読

説ハ丞六二三十とよつる之志られハぬ川を六ハまんこう論あり
にしを嵩の字なのよ
ゆうす細引綜よ注　めりとやこうに嵩乃ゐかし此数の字
上かけれハ又代のよかくとしむへきなり　此事細引志れを綜よ注
一善乃麺よよる紀源標巻り
し
かたるるめてしさたくまに鳴呼川をけふもいふとよみ人られよ
とよめるいふと数の詞われとよみ人ぞれちとよつるおなり
引後撰の哥をやまりりれわるかひもなれ此哥八数の詞乃
ゆしにもぞといへるかるとけらし先定めらし
○きしも
し
若乃歌れをその浮くむけさ人もちかく神代いと度すれまて

此哥乃中代み文字のもぞよ意乃仙形られてめくらむ也
ゆるも坐運いひへりとくさ哥ハてふえ一字よそてまん
形ハ毛あへし　細引綜よちる居の紀をれくたりあるもの哥を引此りあもの　が一字もて意乃おにすると云う一条禅閤の説之
しぞといふてふえく結よ意味有へし
し
うちしも摘さりける哥のやれかやの録さめに記しかき
ひ記しりともしつるを既此去之境よ入のうし後感に
保級共しまへて
し
いるれハ名くちてをめ色なるまつしもうちれ移りなるむ
これもお形る松しも風のとこつる宜くのおるとのおへり
し
東語やはまて此人よ折とめて君るとめれ後語り寸りしも

同御は結句のもじをつゞけて結句を除き読べし
字足らぬ事なくて花合せよし

○さへ ふ かたやハ ありのり らん雑し
へしま つるめる

左右の像目を書よみ持すへし さへに さへハ重 たにハ軽
しかたやハ かたハ強 やハ柔 ありめり ありハ平にて結句の辞 めりハ世にて大底同おし疑の意あり
しらん雑し らんハ全く疑 雑しハ大底にて也 へしまし へしハ強 ましハ柔
しつるめる つるハ既住 めるハ見在 足等の字は綱引て縄とつかく
紀貫之も打軽重緩急皆事ハ一首の趣一句に替
まなへし

○さへ

六百番歌合より

左勝 さとの世は打かさね持かれ行もとれ行のこ色
右 さそれ人のこ谷地きぬなハちむかしこおかむかしかれ 有家
後成判 左はたにのおかしくかれいさへの字懸隔 家隆
なるかやたに勝まかへし

○たに

六百番歌合より

谷川の水こたゆる山にふ人もまき世のけされたれまこ音 寂
左方人ふにかたよかりすこそと

千五百番歌合に
忠乃色ふかき花にとまる鶯なるはまれむしろ立
忠良卿判にいはく…の字優なりとそ
○かへ
かの字ハ疑乃詞の下にありや°ハ疑の詞なきにかかる事
細引鋸に注　千載集に
さ御しろ書きかへていかなるや名をうきてかの前にかかる辞
けふハいかなるやとそうよする疑の詞有ハいふかせよ
七日にひさしゆけいふくとそかし°いはずとの事なり
葵老にうつるやかへりみるにとしくしかしてあはせよ

しとうちやねあをきこれもあやといつりあまに
すそやはりけれあらじもあれの字をなその疑の詞あし
下にやとそう但あそハなそやといふあすをとる也
さしるの様せもちてあるハ稀なりしいはれあるゆへ
けふ乃終の詞やすくまたもえくさつんと傍例にハ乃
あつり須広集に
春の野に子の庭ハ雪ふれとまたもえ出るハ若菜
ともえるは終乃か°ゆ字　盛ありてゆるす也

後拾遺集ニハ
けしきの山郎とのうすれ拾遺愚草自外にかれ世中に
とのうれへてのまえ和学の人好き詠をえうるとおるの侍秀
逸品及を次但古今集ニ曰ハくもあてもかりハ山のけ
うそけりの影注とうしハと首密勘と思ふハ山乃それ
もとの字并に句れとにつくしはさとの方ハ耳きちても
きさきしを

○や

六百番歌合ニ
ゆくに本ハありぬとや波のやみえ此田井に鴫をきつまる

右ハ人ばかりしいまの字耳ニえらしいつかりけは
まう謂なし新古今集に
勝ちのや外山乃杜やしみる出初れけよ置乃あする
此方袖五月二句のすしいや乃をちいはましきあはすて
集は入て和学者人ハ野月様をやきうきやちやうに
花やおちをとあるハ子細あり千五百番歌合ニ
さのかわや牛ちら川ニ舟ちて網代ニひをきれるも称寺
蓮縁利ののぬ乃牛ちら川ト社あるくもとくりのふ
やハきくつ寺古今集に物名
浪のうせきれハ玉そみえけるいろう袖ニけの物かむや

此絵のやハらすくぶひとそそふぬんにうくとかのも
かれやしいつもかれとくうまくやのまさゞ活すし
薬ちぎハいてにうしをやしいひをにうしとハらうそめり
やめしをやのやうはめし花末摘花にまさし木の枝にかゝる
りのともかめるハやとおうしとえるも唯になるハとおうしれ
衣うり細流に着手(モノヲ)也と注せるハくとえ西
○ありき　本のまゝなり
花紅葉にハ艶てめ寒ときこえれめぬ絵にえのゝの
露消はかゝる袖なりけり。とえるを此歌ふえ或説に
袖なりんとハ仏なとえると袖なりにくけき西

まくてぞ。世ハ俗にそまじやかうじやとひとすけゝうとは
ぶのゑハ花くれ露消のうえ袖をとえるく俗にいそ
右どぶの露消はかゝる袖じやうといふ花く六百番歌合に
めかまくハとやさきの露にまかさしも錦きぬさひえぶり
左方人云ゆしもとひてまうなもくま花さるもみ
にうもとぶ　貞永六年歌合に
左ゆんうさふもひ月もうつりのにふ宝ハにうれぬそらり
右方人云わされ入りとぶひそふる詞くらなしくや侍
らんとぶ　遠鳩の歌合に　家隆の歌なし
いしをせられめぬまうたなりけりとまめる下ぶ句ぞ

後鳥羽院ハよろしく無かるよし仰られて二首ある
越よりくるも行しても第一首ありきり

○らん

六百番歌合に

判 蘭や蘭の古語もちうつる歌のことにかまへ求め
判に蘭ある紅をちらんとそ有へきかとちうつるんても
未叶ても字さらりや　文亀三年内裏歌合に
判 流行ハ桃とちらん樹まろ清まろれはけ小らりて
岩鷹の判に桃にすこしけ絶らんと云らりにて桃に
きらんと絶る詞をも能見あらしとなり

○らし

六百番歌合に

判 紅に関乃小河もあるにはち喜雅ぬ山にのみちなし
判 小喜雅山寛の小河らしに不及経るやかのこむろ山
に附事なしすてにかは紅葉し云
判 木向もは由にきこし是合ぬをうてゝの流れ清くなる
とこすり二句さうんても有へきうやし一条禅閤ハの子へ
了秋ちおの冥ぬ小河の分ハ喜雅山閣の小河の経近ぬれハ
らしと疑へきにあらぬ後の世にきこえしハ十分
疑てらんと有へきぬくらんらしとをら別もなし

○つ

千五百番歌合に

むさし乃は草のゆかりも忘られつゝ[illegible]の京乃宮[illegible]

[illegible]判にはつとよめるはいふ作るやまとこと

○ぬ　ぬる

ぬは倭には不のぬとはいはしぬ[illegible]ることの又[illegible]

ぬといふは助字乃矣の字に通ふる死矣語、已辞と

字書に注せり　但ぬるもぬもすくに詞のつくりなり

[illegible]し又云つ。ぬ。る。ぬるは去字にかはる[illegible]定り

ある字の体[illegible]事は助字[illegible]義と

なし日本にては[illegible]理[illegible]にて[illegible]ても

助字[illegible]にて[illegible]決定してある

へし　次　拾遺集に

いろも[illegible]にお[illegible]桃源[illegible]にあは[illegible]

花はちり[illegible]半[illegible]

新古集に

[illegible]桃[illegible]

[illegible]の字ナシ反又也或説け二字の

ぬは[illegible]通[illegible]ぬとん

は通ふといへる[illegible]義理

あくしなる各讃岐とさぬきと割 薫衣香とくぬえ
とそうり是ホぬどんと思ひきりかゝりて銘し私云
せ流れまりたる弟に結もて或流のまゝに書付る
六百番歌合に
命かハ何の子ぞやゝ無めん知りともめ方そおもしくあるも
刺に憎めしめ方そおもしくものと云ふるそそきぬる
とは何とあくにかりとてハと出一束の事も書付し
何とをと云 建保内裏御歌合に
附せぬめめ是定家しにゝぬもとひま川ゝり也
定家の刺にせぬの月と難しおくり此独ありて書付

何のまゝられとある如く 新勅撰にハ俊成ぬハ家のぬ
まく今く旧き之早めの二川わんかゝ六弥よ嫡の人し
折も弥もし乃むら乃那へれをきめ梳を抑やせてん
とよみ中勢の歌生れ歌合を書きの弥と書ゝめ集もん
歌も多し以て書ゝおもしり紀とそう
○つ
づハありけくといひんとかりつゝとゐるとききしくハ志く
きしくると云ふしくると云ふ雪つ也 細引総番注とも思え
風ハめしひかききしつゝとしあるハまるにめしゝびる
ハ何川と云んあまり川とひひてきひとなすまくり

此哥俗人誤りて出くまし川と俗本に多く誤返
よみはさしくしけり清つるのぞ詮すべき
いのりつる平野乃川の水上にまかせてそみる男子の世を
此神を人をかけてもしめ給ふのことにたとへしるや孝を
基俊いひてり家隆卿乃哥あり又ありさまあり久
く乃月映る釣のまとひしてある此哥を入つけ
千五百番歌合に
昔清りの庭水さらに風ふけは新れ嵐の事をかへつ
新古今和歌集の羽うちそや侍らんと知るなく
露はめも川く實ありつるとよめる茂実に優よ

耳なれて侍るは此哥の事なりつるはふそふきて侍らん
○秋
ぞと第三は上句すらくしとこ漏るもすくとひな
してと侍るなり　或は操と書注と異く　古今集に
文句の出れし流さらへりかくそたこめけりとも右哥
此歌は才句にて初は切く結句にある流さけるの跡と
とる此あるもおもしとる釣合体とかわれり
哥の意味かるきらりもつる余情ある人のいかそれの意
此哥伎説乃古製と新後拾遺集に曉きもつるかは
ましてつれなりはかりきは猶くしてなほしく

きこえ侍り
夕くれのまかきハ山と見えなゝむよるハこえしとやとりとるへく
此古今集の定家卿本にはみえしめかしと書り密勘ゟ
家本まかきハ山とみえなむを用 但見えぬ深意あれ
遠しとそり杉立見えなんハ見えしよかしみえぬ見えぬも
無してきけハみえしめかたえしの心なれハ深意ある遠
ふくそり前篇に西も出しぬかとある八前に通せる
「かの字にて心八西をのそぬか妙をよくしみえ心こ此心にある
。外古今に多く侍るへし
〇言水を栗枝稍よ来むさる例

後撰集に
人しれさまは清そらの袖乃けさしもとけすおもへるへし
め家のけさしも岸乃八島のゆゐちことさにのさしも
とハ云々よ知れし　細引縄　を引
後拾遺集に
みちよへてなりけるものゝ何ならてはのとしもはるゝ雨神ん
此歌ハ桃としのくいふ百年にさへたり此仮古歌よ
おほく後へなれと初学の人ハ姑く除き入へくす